
ディサバウド

三叉槍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディサバウド

【Nコード】

N0519R

【作者名】

三叉槍

【あらすじ】

ヴィガロ陽工同盟。闘匠と呼ばれた男を起源とするその国は、職人を目指すならかの国で学べと言われるほどに工業、特に鍛冶が発達しており、それに伴う陽徳連、陽術師の誘致などによっても、順調な発展を遂げていた。世界情勢にもこれといって大きな動きはなく、人々は太陽の恩恵と、平和や幸せを享受して日々を過ごしていた。

そんな時、一人の少年が自らの夢のため、または逃れるために、大陸屈指の聞こえの高い名門陽術学府の門を叩いた――。

発端

遙か昔。未だ国という概念も薄く、狭い範囲に小さな村落が数多く形成され、確固とした交流も行われずに人々が暮らしていた時代の話。

全ては、とある村のその外れに住む、たった一人の男から始まった。

鉋を握れば瞬く間に家を建て、楽器を持てば蠱惑的な美曲を奏で、論を交わせば専門家をも呻らせる。

男はその卓越した業を二つ三つに留まらぬ数多くの分野で発揮し、あらゆる未踏の境地をその好奇心で以て切り拓いた。その手広さたるや、各方面の指南書に彼の名が記されぬものは無いほどである。

特に剣士、鍛冶師としての腕前は凄まじく、現代でも『闘匠』と謳われ、並び称される者はいない。

唯一惜しむらくは陽術の才の欠如のみとまで伝えられるほどの天性を持った男は、だが職人氣質の無愛想故に、長らく近隣で噂されるに留まっていた。しかしある時、当時としては相当品質の良かった彼の各作品の一部が世に出回ったのを皮切りに、彼の名は球面に落ちた一滴の波紋の如く全世界へと広がっていった。

そして男の元には人が集まりだした。ある者は師事を乞いに。ある者はそれを産業として確立しに。ある者は彼に代わり巨大化した人の流れを統率しに。そうして生まれた集合体の中枢に彼が立つことは無かったが、彼の弟子達を含んだ有志の住民による統治の中でどんどんと膨れ上がり、やがて村を町へ、町を都市へと変え、工業において他の追随を許さない小さな国を作り上げた。

国の名はヴィガロ。ヴィガロ陽工同盟。

前夜

手を翳し、一瞬グツと力を込める。

「っ——」

もう何度繰り返した動作だろうか。掌に走る痛痒にもいつの間にか慣れてしまったなと、青年は苦笑を洩らす。

夜とはいえ、時節柄室内はそれほど寒くは無く、寝巻だけでも十分に暖かったため掛布団は目が覚めた際に剥いだ。右手を腕枕に、ぼんやりと天井と、そこに伸ばした左腕を見つめる。

どうやら明日——既に今日——に備えて早めに寝たのが裏目に出たらしく、朝の気配がまるで感じられない時間。自覚できない程度に緊張しているのかもしれないが、そこはまあ御愛嬌といったところだろう。

ふと、周囲を見渡す。

室内は暗く、ベッドに横たわる自身の体すら満足には見えなかった。光源は天球に映える半月のみだ。太陽のもたらすそれとは比べるべくもないほど淡く儂い月光が、ほんの申し訳程度に部屋を照らしている。

しかしその輝きは、他の暗がりとの境界線をはっきりと知覚できる程度には鮮やかだった。確認するには十二分。

目標を設定し、再び天井に向けて真っ直ぐ掲げた左腕を見る。二度寝する気にもなれず、手持無沙汰に始めたことだった。

だがそこに確かな手ごたえを感じた。恐らくは、過去最高の。緊張にゴクリと生唾を飲む。

耳を澄ませば、水晶が震えているかのような。微かではあるが、リイン、リインと美しい音が聞こえてくる。あと少し——。そんな思考が胸裡を支配する。心臓が脈打ち、掌に汗が滲むのを感じる。

逸る心を抑えつつ、青年は右腕を月光へと向けてゆっくりと振り

下ろす。夜陰に吞まれていた腕の輪郭が、光のベールとのコントラストによって徐々に現れてくる。それは微かに幻想実を帯びた情景だったが、しかし構わず下降は続き、ようやくその全形が顕現する。瞬間、光がぐらついた。

いや、正確に言えば、窓から差し込む光の帯に、腕の動きと連動するようにじわじわと小さな円形の揺らめきが出現したのだ。紙一重の差で浮遊している——腕と接していない——ように見えるそこは、波紋に弄ばれる水月の如く輝きが渦巻いていた。

綺麗だな、と青年は思った。似たようなシチュエーションで同じことをやった今までの何時だって、これほどの美しさを備えていたことはなかった。間違い無く会心の出来。

「……」

だから青年は、暗澹の中でさも満悦げに微笑んだ。杯を支え持つかのように広げられていた左手を、快哉の全てを押し込めるようにグツと力強く握り締める。

もうすぐだ。目指す領域は、もう決して遠くは無い。

そうして歪みがフツと口き消えると同時、窓が開いたわけでもないのに微風が巻き起こり、青年は逃げるように全身を布団に包ませる。

後はただ、月明かりと静寂だけが部屋を満たした。

森の中の一騒動

『居住区』と『北森』の境界近く、いつそ郊外と言ってもいいのではないかと思われる位置に建立された古びた一軒家を、しかしゼオンは気に入っていた。

確かに買い物に行くにしても通学するにしても、お世辞にも便利とはいえないが、周囲を囲む木々の豊かな緑と味のある木造の家は、それら欠点を補って尚余りある作用を発現する。具体的に例をいえば、朝の目覚めがすつきり爽快であること、などだ。学生の一人暮らしとなる身としては、これほどありがたいことは他にない。他にも理由がないではないが、割愛。風呂とトイレと台所と自室が有ればとりあえず文句は言つまり。

おかげで、普段より短い睡眠だったが二度寝の欲求に負けることもなく起床。一旦伸びをしてから新鮮な酸素を取り込もうと窓を開けると、木々の間を通り抜けたさあっと流れる風は、淀んだ部屋の空気を緑の香り溢れる冷風と入れ替えていった。

最後に残った眠気までもが奪い去られていくかのような感覚にしばらく身を任せてから、踵を返す。その視線の先にあるのは、ハンガーに掛けられた真新しい制服一式だった。

サファイヤブルー

初春、さわやかな晴天の早朝に相応しい清純な青を宿した真新しいブレザー・ジャケットとズボン。三つ巴の紋が燦然と輝く白ネクタイ。艶やかに光る黒革のベルト。新調したカッターシャツ。

それら全てを着用し鏡に映した自分の姿は、悪い意味で全くの別人だった。

「……」

買って間もない制服は似合わないもの、と思っではいたが、予想以上に気恥ずかしい。これが服に着られている状態、なのだろうか。横を向いたりポーズをとったり、矯めつ眇めつ見てみるが、どうにも違和感が拭えない。虚像の自分からは、目一杯無理をして親の服

を着た幼児と同質の滑稽さが滲み出ており、以後三年間この身を包むことになる服によるいきなりの裏切りに、溜息とともにがつくりと肩を落とす。

だが、なにか見落としがあり初日から服装違反でもしてしまつたら、方々への第一印象は最悪のものとなるに違いないのだ。あの親愛なる問題児が居る以上無駄な努力かもしれないが、水を掛けて損をするような焼け石ではあるまい。そう思い直し、きまり悪さを押し殺して再度鏡を正視する。

男子にしてはやや軟質で自己主張に乏しい黒髪に、少し茶色の混じった黒目。最近ようやく男らしさを醸し始めた、主婦殺しとも呼ばれる溫柔で気弱そうな顔立ち。人並みの身長に、細く見えるのが意外と筋肉質でしなやかな体。

総じて言えば平平凡凡極まりない、いつも通り——少し情けない——の自分の姿が、そこにあった。

寝癖らしきクセ毛を直し、ネクタイの角度が気になったのもう一度締めなおし、まだ時間に余裕があつたので頭の中で持ち物などに不備が無いかどうかチェックしていく。

生徒手帳、胸ポケット。必要書類、カバン。筆箱、同じく。財布、腕時計、ノート、ハンカチティッシュにシューズと弁当——。

天井を見上げて指折り確認。準備は万全。鞆とともに、傍らに立て掛けておいた胸ほどまである細長い包みを持ち上げて、ちよつとした感慨と共に再び虚空を仰ぎ、大きく息をつく。ヴィガロ最大の陽術学府、待ちにまで待った今日がその入学式。

「さて、と」

とりあえずは、朝に弱い友人を迎えに行くのでしょうか。

知らず口の端が吊り上つていたことに気づき、なお笑みを深めた。

十分後、ゼオンは道無き森を歩いていった。

『中町』を挟み『工業区』と相對するヴィガロ自然公園、通称北森には、遊歩道がある。当然、朝の散歩に訪れるお年寄りなどはそ

ちらを使うのだが、ゼオンはショートカットのためにそれらを見殺しにして突っ切っていく。落ち葉もほとんどなく、地面も固いので歩きにくいということはなかった。

「眠いなあ……」

欠伸を噛み殺し、ぼやく。やはり冷風でも相殺はしきれなかったらしい。さわさわと揺れる柔らかな木漏れ日の温かみが、その眠気に拍車をかける。この包み込まれるような感覚は好きなのだが、今は困りものであるのも確かだった。

ちらと小さな包みがひとつ増えた自分の右手に目をやる。細長い方の包みに引つ掛けられてプルプル揺れているその三角柱形の中身は、おにぎりである。

少し離れた所にある友の家を訪ね、既に家を出たという話を聞かされたのは、つい先ほどだ。なぜその時に連れて行ってくれなかったのかと疑問に思ったが、どうやら三時間ほど前の話らしい。

彼らしいと言えば彼らしいが、さすがに日の出前というのはいかがなものか。笑いを必死に堪えたこちらの身にもなれという。人のことは言えないが、大方、眠れず待ち切れず、とりあえず飛び出してみたとかそんな感じではないかと思う。当然朝ご飯も食べていない彼に届けてほしいと託されたのがこの包みであった。

思い出してくつくと笑う。流石に友のこの行動は予想の斜め上だった。面白い。

ひらっ、と一枚の木の葉が舞った。

「――」

ぴたりと歩みを止める。上、恐らくは樹上。逆光でよくは分らないが、気付いたことに向こうも気付いたはず。体勢を整え、今にも襲いかかってくるだろう。自然落下を加算した力は受け止めるには重い、着地を狙えば――

――などと普段であれば考えるのだが、生憎と今日は右手に必勝

のアイテムが携えられていた。あとはタイミングが合えば、それだけで勝負は決する。重要なのはスナップだ。

枝を蹴る音が聞こえた瞬間、ゼオンも右腕を振り、その勢いのまま長い包みに引つ掛けられていたおにぎりを跳ね上げる。

「うおっ!？」

二つの影が交錯する寸前、困惑と驚きの声が聞こえた。危険物ではないと判断して掴み取ったらしい。目の前に着地し、勢いのまま前転してから飛び起きた人影に、ゼオンは苦笑を投げかけた。

「……ちよつと予想外に過ぎるよ、ガラク」

「ッはっはっはー。そう言うなって、退屈だったんだよこつちも」
からからと笑い、てかおにぎりサンキュー、と礼を言いながらガラクと呼ばれた男が振り返る。

「だからって僕を巻き込まないでよ……」

余りにも楽しそうなその笑顔に、ゼオンはがっくりと肩を落とし溜め息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0519r/>

ディサバウド

2011年11月16日12時24分発行